

# 芸術文化だより

第55号

令和3年3月25日

発行者

習志野市芸術文化協会

会長 中谷 時男

編集長 小笠原仁仙

◆習志野市芸術文化協会／広報◆

題字 吉原 聚堂



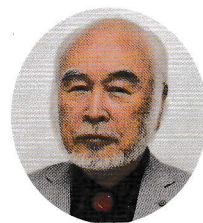
実初本郷公園

写真提供：安藤 裕二

## コロナ禍の中の芸術文化

習志野市芸術文化協会

会長 中谷 時男



人は厳しい自然の変化に戦ぎ  
震え、動きが悪くなる。

今、コロナ禍の中、自粛生活を続けているが、令和の新しい時代の入口から災害列島と化しており、その中で私達創作者は如何になし、果すべきか苦勞してきた。

古代ギリシャでは、芸術文化は人の心を癒す医療の一つであると掲げられ、復興のための大きな活力となった。そして衆は集となり安寧を願ひ演じ、創造してきた。

私達の習志野市芸術文化協会は、一二四団体四、七六二名の会員を擁する大きな協会であり、個々の団体はそれぞれ独自の活動の中、成果をあげている。

「二隅を照らす者 これ国の宝なり」と云われるが、各々小さく点した灯が、一同に会し、大きな光となるのが、毎年、開催されている、芸術祭である。

その日のため、実のある活動が続けたい。私の師であり、習美会と、文化協会の会長を長い間、務めてこられた、金子定雄先生がいつも云われていた言葉

「森羅万象」大自然に学び。

「氣韻生動」氣品のある生き生きとした趣。

いつも心に懸けている言葉であるが、最近少し解かるようになってきた。

創作者には大切なことである。

金子先生が七十六歳で亡くなられて三十年、今、私もその歳を越えた。